

第2部 | 分科会

全ての子供たちに豊かな体験活動を

第1分科会

学校教育における体験活動を見直そう！ ～リアルな体験活動は可能か？～

コーディネーター 坂本 昭裕 氏 [筑波大学教授]

実践発表者

二瓶 昭夫 氏 [新潟県教育庁上越教育事務所社会教育課長]

近藤 和久 氏 [上越市立城西中学校教頭]

- 現代の子供たちは成功体験が少ない一方、褒められて育ってきている。リアルな体験活動は子供たちに自信をつけ、自分や集団を見つめ直すきっかけになる。
- 体験活動に「危険」「大変」「分からない」などの印象をもち、苦手意識のある教員も多い。管理職や主任によるコーディネーターとしての役割が重要になる。
- ねらいが明確なら短い時間の体験活動でも児童生徒の意識は変わる。自然の中でのリアルな体験活動だからこそ見られる子供たちの姿、できる評価がある。
- リアルな体験活動は児童生徒の意識や行動の変容、多様な気付きや学びにつながる。その意義について学校現場で理解を得ていく必要がある。

第2分科会

幼児教育における自然体験活動に学びがいっぱい！ ～不自由な体験から学ぶ～

コーディネーター 伊野 亘 氏

[上越市立高田西小学校介護員、元国立青少年教育振興機構理事]

実践発表者

笠原 千鶴留 氏 [(福)恵信会ときわこども園園長]

- 年々子供たちの様子を見てみると保育園の送迎は自動車、冷暖房付の家に住み、コンビニなどで安易に食べ物が入るなど、恵まれ過ぎた環境の中で育った子供たちは、自分で乗り越えようとする力が乏しくなり、我慢する経験が少なくなっていることに危惧していた。
- 子供たちは豊かな自然環境の中で、「暑い」「寒い」「しんどい」「汚れる」「触れる」「嗅ぐ」などの諸感覚を通して、たくさんの直接体験をすることで困難な場面でも「自ら乗り越える力」が育まれていると感じている。
- 自然の家での活動が18年経った。今では、源流探検で水が冷たく、手足や衣服が汚れても最後まで弱音をはかず沢を歩き続けることができ、深雪探検では、進みにくい雪原を長靴やウェアに雪が入っても体が埋まっても遊びこむことができた。
- 自然環境の厳しい状況でも、自分の力で乗り越える姿が多く見られ、自然環境に素直に順応する姿は、子供たちの豊かな成長に繋がっている。

第3分科会

体験活動の感動を高める伝えるICTの活用

コーディネーター 中野 充 氏 [新潟青陵大学准教授]

実践発表者

上松 恵理子 氏 [東京大学先端科学技術研究センター客員上席研究員、(株)スノーピーク社外取締役]

- 学校などの教育現場でのICT活用は時代と共に変化し、その活用場面や活用方法は拡大してきた。これからはICT活用によって新たな価値を創出することが求められるようになる。
- 新たな価値を創出するためには、教師が生徒とともに「学ぶことを楽しむ」ことが重要である。

- 海外のICT活用は日本に比べてかなり進んでいる。端末の普及率も高く、環境も整備されており、子供たちが学ぶ場を選択できるようになっている。
- シンガポールでは生成AIやVR・ARを活用した学習が進められていると同時に体験活動を重視したOutdoor Educationに力を入れており、リアルとバーチャルを融合させた教育活動を展開している。



第3部 | 全体会

分科会報告まとめと指導

平野 吉直 氏、坂本 昭裕 氏、伊野 亘 氏、中野 充 氏

坂本：第1分科会では、学校で短い時間でも職員間で話し合いをして、体験活動の目的意識を明確にして一体感をつくり出すこと、体験活動について施設職員等が情報発信すること、管理職が主体的に自然体験活動を行う体制をつくること等の必要性の意見が印象的でした。

平野：学校で体験活動をこなせるかは難しい課題です。

坂本：野外教育の指導者は、専門的な何かをやらなければならないと、とらわれています。学校は時間的なゆとりがないから、何かプログラムを省く部分があっても良いのではないかと感じました。

伊野：管理職は子供の成長のためにどんな体験活動をするか担任とともに考え、様々な所に目を向けてコーディネート力をもって地域とつながっていくことが必要です。第2分科会では、園長先生からきらりと光る言葉をいただきました。「自然体験をしている幼児の目の輝きが変わります。横で見ていて、園児の達成感を感じます。長靴に入った水や雪の不快感が楽しい活動によって吹っ飛んでいきます。乗り越える力、身体能力、豊かな感性等の力が伸びています。」先生方は木登りで自分の力で登れない時でも、援助の工夫により、自分の力で登り切ったと意識させているそうです。職員の意識を高めるため月に1回エピソード考察の会を設けて実践力を高め、全職員の共通理解を図るそうです。後半の協議では、課題等を話し合いました。最後に妙高市の園で藤巻山登山をしている事例が紹介されました。山頂で園児が喜び先生自身も嬉しくなるという感想を聞き、会を閉じました。

平野：私は5歳児キャンプをしています。自然の中で目がキラキラして、感性が育まれることがわかります。言葉や人との関わりの中で感性が育まれます。それは幼児期や小学校に入る前の時期に培われるものです。

中野：第3分科会では、上松先生からの諸外国のICT活用の事例を基にデジタルトランスフォーメーション、デジタルエイジング、SNSの使い方等を議論しました。問題もありますが、いかにSNSを活用していくかが大切です。様々な人たちの交流、それにトランスフォーメーションしていくことにより感動体験が取り込まれていくことをまとめに会を終了しました。

平野：リアルとバーチャルの融合という言葉聞き、社会の大きな変化の中でリアルとバーチャルの両方の体験を今ここにいる子供のためにどう使うか、どう利用していけばよいか、きちんと考えていかなければなりません。今の子供のことを思い、体験活動を考えることこそ大切だと感じました。本日出されたご意見や実践を参考に、体験活動を積極的に推進していきましょう。

発行 令和6年2月

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家
〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2
TEL 0255-82-4321 FAX 0255-82-4325

令和5年度 文部科学省委託事業「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」

全国青少年体験活動推進フォーラム

ウェルビーイングを実現させる体験活動 ～全ての子供たちに～

報告書



事業の概要

【開催日時】 令和5年11月18日(土) 9:45～15:15

【会場】 国立妙高青少年自然の家

【主催】 独立行政法人国立青少年教育振興機構国立妙高青少年自然の家

【後援】 新潟県教育委員会、妙高市教育委員会、上越市教育委員会、糸魚川市教育委員会、新潟県社会福祉協議会、妙高市社会福祉協議会、上越市社会福祉協議会、糸魚川市社会福祉協議会

【趣旨】 「本当の幸せとは」「一人ひとりの幸福とは」について体験活動の視点から一考察を行う。様々な体験活動を通して得られる、自己有能感や自己肯定感がどのような体験活動プログラムで生じ、どのような物的・人的環境の中で構築されていくのか、各分野の実践発表や、ワークショップ形式等による協議を行い参加者同士学び合いを深める。この学び合いを参加者一人ひとりの企画・運営等に活かせる内容とする。ウェルビーイングを実現させる体験活動の重要性について再認識をするとともに、様々な実践事例について考察し、成果や課題等について全国に普及啓発する機会とする。

【対象】 青少年教育指導者、教員、学生、教育行政関係者、幼稚園教諭・保育士、体験活動に興味がある方、体験活動の指導者を目指す方 等

【参加者】 103名

【企画委員会】 委員長 明石 要一 氏 [千葉大学名誉教授]
委員 平野 吉直 氏 [信州大学理事・副学長]
坂本 昭裕 氏 [筑波大学教授]
中野 充 氏 [新潟青陵大学准教授]
伊野 亘 氏 [上越市立高田西小学校介護員、元国立青少年教育振興機構理事]
小林 朋広 [国立妙高青少年自然の家所長]

日程と内容

10:15～10:25 開会式 開会のあいさつ (国立妙高青少年自然の家所長)

10:30～12:00 鼎談「ウェルビーイングを実現させ、夢や希望を与える体験活動」

講師：平野 吉直 氏 [信州大学理事・副学長]
種田 恵 氏 [オリンピック 北京オリンピック競泳]
上松 恵理子 氏 [東京大学先端科学技術研究センター客員上席研究員、(株)スノーピーク社外取締役]

13:30～14:30 分科会「全ての子供たちに豊かな体験活動を」

第1分科会「学校教育における体験活動を見直そう！～リアルな体験活動は可能か？～」
第2分科会「幼児教育における自然体験活動には学びがいっぱい！～不自由な体験から学ぶ～」
第3分科会「体験活動の感動を高める伝えるICTの活用！」

14:45～15:15 全体会「まとめ」

① 分科会コーディネーターの報告 坂本 昭裕 氏、伊野 亘 氏、中野 充 氏
② 企画委員によるまとめと指導 平野 吉直 氏、坂本 昭裕 氏、伊野 亘 氏、中野 充 氏



独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家

「ウェルビーイングを実現させ、夢や希望を与える体験活動」

【講師】 平野 吉直氏 (信州大学理事・副学長)
 種田 恵氏 (オリンピック 北京オリンピック競泳)
 上松恵理子氏 (東京大学先端科学技術研究センター客員上席研究員、
 (株)スノーピーク社外取締役)

平野：フォーラムの中心にある「ウェルビーイング」は、「体験活動とおして、全ての子供たちに喜びや感動、やりがいや達成感を提供する」ととらえ、進めてまいります。ご参加の青少年教育関係者の皆様には、鼎談を受けて「青少年にとって本当の幸せとは何か」を考えながら青少年期における体験活動の意義を再認識し、より多くの青少年に質の高い体験を提供するという意識で今後の体験活動の企画運営につなげていただければ幸いです。さっそくですが、これまでのご自身の人生の中で、ご自身の成長に繋がった、大きく影響したと思われる成功体験・失敗体験を教えてください。



種田：子供の頃は、要領が悪かったり、できるようになるのが遅かったり、失敗することが恥ずかしくて、新しいことに挑戦ができませんでした。水泳も初めは自分に自信がなく、自主練習をする努力もできませんでした。競争よりも、ただ水の中に入るのが好きでしたが、長く水泳を続けているうちに、徐々に速くなりたいと思う気持ちが芽生え、前向きに自主練習をするようになりました。自分の素直な気持ちや、目の前にある手の届きそうな目標をまずもてたことが、オリンピックにつながる大きなきっかけとなりました。目標が明確になると、辛さだけでなく、楽しさ、うれしさを感じるようになり、コーチとも対話できるようになりました。それが自分の成長に欠かせないものとなりました。その中で、涙が出るほどうれしかった体験が二つあります。一つ目は、新潟県長岡市の宮内で練習していたころ、200メートル平泳ぎで日本記録を樹立したことです。この記録への挑戦で、努力は裏切らないことがわかりました。練習してきたことが間違いではなく、努力が実った瞬間でした。もう一つは、2008年の北京オリンピックの選考である日本選手権の成功体験です。4年に1度のもっとも緊張感溢れる大会でした。そのレース展開をコーチの作ったくじ引きで決め、引いたくじは自分の一番得意なレース展開でした。コーチのくじ引き作戦のおかげで、迷うことなくレースに向かうことができ、オリンピックの出場権を得ることができました。緊張をうまく生かした体験でした。かたや多くの失敗もありました。日々練習で努力を積み重ねても、レース当日に良いパフォーマンスをするのは本当に難しく、調子が悪くなるのは一瞬でした。自分にとって今まで一番思うようにできなかったのは、一番憧れていた北京オリンピックでした。失敗に向かう私の心の中は、だめだったらどうしよう、周りの期待に応えられなかったらどうしようという気持ちでした。成功するときは、心が安定していて、体の限界に挑戦することができました。私はオリンピックが決まってから、心が体にストッパーをかけているようでした。

北京オリンピックでは自己新記録は出ずに決勝で8位でした。周りの目を気にし過ぎずに、自分の気持ちを大切に、もっと自分自身の内面と向き合っていたら、よい方向に向かっていたのかなと思います。

上松：私は、子供の頃から、失敗だらけでした。雪国で育ち兄弟もいなかったの、親が手に職を付けさせようと3歳からピアノを習いました。ピアノの練習をしないと親に怒られていました。親は音楽大学に行かせようと思ったらしく、高校の時に音楽大学の夏期講習に参加しました。ピアノを思い切り弾けると思って参加したのですが、講義だらけでがっかりして、親の反対を押し切ってピアノをやめ、4年制の大学に入りました。その時、ピアノをやめるのなら教職を取るようになると言われて教員免許を取りました。大学を卒業後は高校、中学の教員をしました。子供の頃のピアノは失敗だったと思いましたが、今思うと教職を取って教員になれたので、結果的によかったなと思っています。中学校の教員の頃、コンピューターが出回っていて、成績処理やコミュニケーションツールとして学校で使えるのではないかと思いました。それでもう一回学び直しをしようとして社会人入学で大学院に行き、博士課程を取りました。大学で研究をしているいろいろな国を回ると、日本が先進国の中でICT教育に遅れていることがわかりました。そこで、何とか日本の国のICTが教室で当たり前になる時代になると考えて大学の教員になりました。日本のICT教育の水準が高まるように研究しましたがすぐに学校に反映されなかったの、国会議員や国に働きかけようと思い、今は国会議員連盟のICTの教育利活用促進に関わる有識者アドバイザーもしています。ICTだけではだめで、キャンプとか自然体験は大事だと感じ、スノーピークの社外取締役就任をきっかけに早稲田大学のビジネススクールで学びました。失敗しながら何か社会の役に立ちたい、子供たちの幸せにつながればと思ってここまで来ました。

平野：学生時代に小学校3年生を対象にしたキャンプリーダーをした時の話です。キャンプの思い出作りとして、しらかばの木でネームタグを作りました。失敗しても自分の手で作ることが大切だと考え、黙って見守りました。うまくのこぎりが使えないので切り口はガタガタ、磨きは適当で、ベタベタにペイントを使いました。それでも自分自身の手で作ったのだから満足していると思ったのですが、キャンプが終わった後、キャンプ場のゴミ箱に子供たちのネームタグがいくつも捨ててありました。指導者としてとても悲しい思いをしました。翌年のキャンプでは、同じプログラムで指導方針を変えてみました。いい材料と一緒に探し、切り方、磨き方を指導しました。ペイントを使った絵は下書きしてみようを指示しました。満足したネームタグができたようで、その翌年のリピーター参加者の首にはネームタグが下がっていました。自分自身で主体的に活動することは大切であるものの、どんな言葉がけや指導をしたら達成感や喜びを伝えられるのかを、指導者として深く考えさせられた出来事でした。

上松：何のために作るのかなど、作ったものをどう使うか、最初に目的や目標を示すこと、自分たちで考えさせることが大切です。磨き方の指導も貴重ですね。最近、学校でのこぎり体験をしないことも多いそうです。そういう教室は宝です。ものづくりはいいですね。

平野：ものを作る、山に登る等の活動は、ゴールがわかり易い活動です。その一方で、目標の持たせ方は簡単ではありません。種田さんの取り組みでは、子供たちにどのように目標設定をさせているのでしょうか。

種田：方向性などをその場で示してあげることが大切です。体験では初めてやることも多いですが、家庭で教えてもらえませんが、ネットで情報も得られますが完成形等も教えてあげ、体験をさせていくことが大事です。

上松：小さい頃に何でも経験することは大切です。

平野：興味深い事例をありがとうございました。ご自身の成長につながった成功体験や失敗体験には、いくつかの共通項があるように思いました。主体的に自分で考えて、自分で行動を起こすことが大切で喜びにつながるということがわかりました。今のお話を踏まえ、どのような体験活動が、喜びや感動、やりがいや達成感を生むことができるのかお話を聞かせてください。言い換えれば、ウェルビーイングを感じる体験活動とはどのようなものか、さらに言い換えれば、指導者としてウェルビーイングを高めるために、プログラム内容や指導・支援方法でどんな工夫をしているかお話をください。



上松：ウェルビーイングは流行りの言葉だけれど、「ウェルビーイングの体験はよかった。」と1回体験しただけではだめだと思っています。一人一人の学びが社会全体のウェルビーイングにならなくてはいいけません。クリスマスの高級なケーキを一人で食べるのがよいですか。それとも、キャンプ場で10円か20円のマシュマロを焼いて、おいしさをみんなで共有するのがよいですか。ウェルビーイングは、1回だけではわかりません。一人の体験をみんなに共有するような体験が必要です。

種田：私自身は水泳を人生の中で長く続けてきました。全国と同世代のスイマーと試合や合宿をしました。単純に、勝つと嬉しいし、負けると悔しかったです。それから先に一步進むには、1回の努力ではだめで、続けることで学ぶことが多くあります。自分自身が日々限界に向かって、自分を超越するように努力していくと、自信をもてるようになります。それを経て結果が出ると、嬉しいし、楽しいし、幸せになります。また、努力を積み重ねること、自分の努力を受け入れることで、自分の努力では敵わなかった相手への尊敬の念が芽生えます。水泳は個人競技ですが、一人で戦うのではなく、お互いに応援したりされたりと、リスペクトがそこにはありました。努力を積み重ねていくことで、自信がもてます。一緒に戦う選手への尊敬の気持ちをもつことができると、負けても次の意欲につながります。それら全てが選手人生での生きがいであり、幸せとなりました。人は一人では成長できません。周りの人と切磋琢磨し、お互いに認め合うことが大切なのだと思います。

平野：子供キャンプを企画運営する中で、子供を支援する学生の指導もしています。体験活動の指導場面では、予め計画し

たプログラムに沿って、子供たちはやらされることとなります。子供たちにいかにか言葉をかけ動機付けをして、やる気にさせるかが大切で、直接指導する学生にもその重要性を伝えていきます。小学校3・4年生が頑張って成し遂げられる登山コースと、5歳の幼児が頑張れる登山コースは違います。チャレンジする目標を持たせ、本当に頑張れるコースを用意することが大切です。頑張ってもいないのに、頑張ったねと言われて嬉しくありません。家庭裁判所と連携した非行少年対象のキャンプを実施してきましたが、ここでも参加者の少年が苦勞しながらも夢中になって頑張れる活動を準備・実践し、指導者の大人からの称賛が参加した非行少年の心に響くよう活動内容や支援方法を工夫しています。

上松：ウェルビーイングは、将来につながるものであった方がよいです。また、振り返ってみるとよかったと思う体験もあります。

平野：フロアの皆さんで、質問があればいかがいます。どんな観点からでも結構です。

フロア：上松さんがいろいろなことをされています。その時々で次々と新しいことをされる原動力は何ですか。

上松：2つあります。子供の時にさかのぼり、一人っ子だったので、みんなが笑顔で楽しむことが好きで、一人ではなく世の中全体が幸せになることをしたいなと思いました。もう一つは、今テクノロジーが進化していて仕事の内容も変わっています。ICTを教育の場で使えないことで子供たちがAIを使えなくなることはかわいそうだと思うのが原動力です。また、AIを学んだ先に、自然体験と人と人との関わりが大切ではないかと確信しています。

平野：「全ての子供たちに」の部分について議論をします。最近「体験格差」が生まれています。公教育を担う学校において十分な体験活動を平等に提供できない現状がある中で、格差是正はどこが担えばよいのでしょうか。格差を縮める方策はあるのでしょうか。

種田：小さい頃から習い事や学校等で様々な体験をする機会がありました。水泳もその一つで、長く続けられたのは、学校の先生はじめたくさんの方の協力・支援のおかげです。なかでも一番近くでサポートしてくれたのは母でした。小さい頃の体験活動は、保護者が付き物という印象です。今は情報がたくさん得られます。情報をもって準備をすることも大事ですが、体験をする上で一番大切にしてほしいことは、自分の好きなこと、自分の中にある気持ちです。そうすると、周りに左右されずに、様々なことに楽しさ、面白さを感じることができるようになると思います。

上松：私は格差は絶対にだめだと思っています。きちんとした教育をみんなが受けないと国がだめになります。体験活動は社会性を育成します。海外では、アウトドアエデュケーションが教科にあります。社会の中で体験格差を無くすには、学校で、それも公教育で行ってほしいです。公教育だと全ての子供ができるので教科に入れてほしいです。

平野：野外教育が大切であることをもっと皆さんに理解してもらうことを努力したいです。スポーツやICTを活用しながらできるしくみをつくることも大切です。学校については、今かなり忙しくなっています。学校も子供も大変です。ゆとりのない中で、失敗体験や成功体験なんてできるのかなと思います。その重要性を訴えていくのと同時に、今の教育課程を見直していくこと、ゆとりをつくりながら必要な体験活動を増やすために何かを削ることを考えるのも国の在り方だと思います。鼎談でのご意見ありがとうございました。